

日常に「家庭科」の学びをちりばめたい！

本校では、昨年度まで栄養士が配属されていませんでした。家庭科教員も不在で、給食委員会の担当者も他教科の教員。だからというわけではありませんが、給食委員会の役割は、毎日の給食活動を円滑に行うことを目的とした活動のみでした。給食を紹介する黒板や掲示板にも、献立名が示される程度。足を止めて見ようとする生徒はごくわずか。残食の多さにため息が出る毎日でした。

本年度、栄養教諭が配属されました。早速、栄養教諭が発行する「食のおたより」が登場しました。使用食材の産地や調理方法の紹介、郷土料理が提供される日は家族にも話したくなるような話題が紹介されるなど、毎日掲示される「食のおたより」は、給食前に一読することで、給食の味わい方が変わるものです。他にも、食に関わる掲示があふれるようになりました。配膳時や食事が始まったタイミングには、栄養教諭が各教室を回り、食の話題が提供されます。その効果でしょうか、昨年度より、残食の量も随分減少しています。栄養教諭が配属されたことで、目に見える形で食育が広がっていることを実感します。

今回お伝えしたいのは、「日常に家庭科の学びをちりばめたい」という私の願いです。家庭科の学びは日常の生活と直結しており、家庭科の学びとつなげて問題解決したいことがあふれています。私たちは、そこに目を向けたい。前述のような栄養指導にとどまらず、学校生活の中で行っている様々な行為に対し、家庭科の視点で作成した資料の掲示や声掛けを毎日のように続けていくことで、子供の興味関心が高まるはずです。授業だけでは学びきれないことを、授業以外の日常で学ばせる工夫をしてみましょう。例を挙げるなら、SDGs 1「貧困をなくそう」やSDGs 2「飢餓をゼロに」のフリップを作り、給食の時間に黒板に貼ってみてはどうでしょうか。SDGs 6「安全な水とトイレを世界中に」は、手洗いをする流しやトイレに、SDGs 7「エネルギーをみんなに、そしてクリーンに」、SDGs 11「つくる責任使う責任」はごみ箱、電灯のスイッチ付近にさりげなくアイコンを貼っておく。これらは社会科や総合的な学習の時間等の学習や活動とつなげて、子供自ら取り組めるよう仕向けられます。家庭科の学びが、生きて働く力として定着させるために、ちょっと工夫して日常に刷り込ませる。家庭科が求める見方、考え方の育成につながります。すでに実践されている方も多いでしょうから、相互に情報交換をして、今できることから取り組んでほしいと思います。

浜松市立新津中学校 平野敦子

佐鳴台小 発達支援学級5・6年「お茶をおいしくいれよう」

【実践内容】

本校には、発達支援学級に在籍する児童が5年生6名、6年生4名いる。普段の家庭科の授業においても、知的・情緒学級の5・6年生が合同で行っている。家での調理経験が乏しく、火をつけることも怖がる児童がいることから、調理実習の時には、本校の栄養教諭がゲストティーチャーとして参加し、お茶の種類や茶葉になるまで、お茶を使った食品について実物や写真を見せながら説明した。また、お茶を入れる実習のときにも、お湯が沸いたときの湯気の様子や入れるときのポイントを児童の過程を見守りながら適宜伝えた。さらに、児童が入れた適温のお茶と栄養教諭が用意した熱いお湯で入れたお茶を飲むことによって、うま味や渋みの飲み比べをすることができた。



<栄養教諭が指導している様子>

【成果】

ゲストティーチャーとして栄養教諭と一緒に授業をしたことで、お茶の飲み比べをしたり、実物を見たりするなど、学習がより深まった。また、発達支援学級の児童は慣れないことに対して不安の大きい児童が多いが、目の前で手本を示したり指示を出したりする人が増えたことで、安心して実習に取り組むことができた。（文責：正木 李佳）

瑞穂小 6年「できることを増やしてクッキング」

【実践内容】

本校の6年生は、調理実習や裁縫などの活動へ積極的に参加できる児童が多い。しかし、活動をする際に、活動の手順や野菜ごとの切り方などが分からなくなり、支援を必要とする児童が一定数いる。そのため、実習中に質問が多くでたり、次の活動が分からなくなったりして計画通り作業が進まなくなることが考えられる。その際、手順が書かれたノートや教科書を出して、破れたり、汚れたりするのは避けたい。そこで、本単元での調理実習では、各班に手順の書かれたカードを配布し、調理実習を行うことにした。このカードには、3種類（人参、ピーマン、キャベツ）の野菜の切り方、それぞれの炒める順番を記載しておき、濡れたり汚れたりしても良いようにラミネートしておく。これにより活動が円滑に進むようにした。



<児童が野菜を切る様子>

【成果】

このカードを使って調理実習を行ったことで、活動の中で手順や切り方が分からなくなることが減った。また、切り方が分からない児童がいた時には、周りの児童がカードの写真を使いながら、教え合う姿が見られた。野菜ごとに切り方を確認し、正しく切ることができたことで、作った野菜炒めを食べる際に野菜によって切り方を変えたことで生まれる食べやすさを実感することができた。（文責：青木 拓都）

第3回家庭科研修会報告 <芳川小>

1 授業の様子

芳川小学校6年生、杉本先生による「自分の生活をレベルアップさせるためのオリジナルバッグを作ろう！」の授業では、本題材の第7時の授業が行われました。

本時は、目的に合ったオリジナルバッグを作るために、形や大きさ、材料や縫い方などの工夫を考える授業でした。

初めに、入れたい物や使いたい場面など、目的に合った工夫を考えるという課題が提示されました。その際、形や布の種類などの視点が示されたことで、なぜその形、布にするのかを自分事として考えることができていました。また、杉本先生が、子供の発言に、問い返しをすることで、その袋を選んだ理由を明確にすることにつながっていました。布や袋の見本や、これまでの学習で獲得してきた「オリジナルバッグの生かせそうな技」が示されており、それらを参考にすることもできました。

次に、アドバイスタイムでは児童がグループで交流を行いました。考えたことを伝えたり、アドバイスをし合ったりすることで、相互に考えを深めていきました。

全体交流では、自分が選んだバッグや袋について、理由とともに発表しました。一人一人が、自分の思いや目的に合った工夫を発表し聞き合うことで、オリジナルバッグ作りへの思いとそのための工夫について考えを深めていました。



2 グループ協議

①「自分の生活の中から課題をもち、様々な解決方法を考え、その課題に夢中になって追究し、生活をよりよくしようと工夫する子供の育成を目指した授業」の視点より

○自分の生活に沿ってよく考えていた。見本が充実しており、よりイメージを持ちやすかった。

○好きなデザインを選べるので、やる気をもって取り組むことができる。個の願いをかなえる授業構成になっている。

○形や布を選択した理由をじっくり考えさせ、全体で共有したことがよかった。

○前時までの製作で得た知識が生きている。(色選び、布選びなど)

△自分の考えがまとまっていない児童もあったので、段階を踏めるとよい。

②「小中5年間のつながりを意識し、見方・考え方を働かせる深い学びにつながる学習過程、問題解決的な学習など、新しい内容を踏まえた工夫された授業」の視点より

○布見本は、触って確かめたり、相談する手立てになっていた。あえて縫いにくい素材を入れてあるので、選択する学びにもつながる。

○それぞれが自分で考えて解決していかないと完成にたどりつかない応用の製作が、問題解決学習になってよい。

○オリジナルバッグなので、様々な視点で考えたり、話し合ったりしたバッグを製作できるのがよい。

△アドバイスタイムは、グループの工夫やジグソー学習などを取り入れてもよい。

3 静岡大学 小清水貴子准教授の講話より

杉本先生の授業は、オリジナルバッグを何のために作るのか意図が明確であり、子供の実態に合った題材構成になっていた。製作が得意な子も苦手な子も、学ぶことを楽しみながら学習し、自分の生活をレベルアップさせたいと思わせるしかけがされていた。

まず、今あるバッグ・袋について考えることで、自分にとっての袋の価値を日常生活から考えることができる。これにより、自己理解や他者理解が深まり、自分の生活に合った「もっとこうしたい」という思いをもつことができる。

また、今回の授業は、題材が2段階構成になっており、1段階目では全員がトートバッグを作り、2段階目では各自が決めた袋を製作する。1段階目で自分の力量を知り、基礎的な技能を学んだ上で、2段階目に応用に取り組む構成は、2回の製作で経験を積むことができ、学びを応用することで子供の思いを生かした個別最適な学びが実現できる。

小学校での袋の製作は、入れるものと袋との「ゆとり」を学習したい。中学校では物にぴったり合うカバーの製作をする。小中学校のつながりを意識し、小学校で学ばせることに合わせて選択肢をある程度絞るとよい。



第3回家庭科研修会報告 <和地小>

1 授業の様子

和地小学校5年生、大谷先生による「生活を支えるお金と物 ～エシカル消費を考えた買い物計画～」の授業では、本題材の第6時の授業が行われました。

本時は、特徴のある4種類の筆箱を色々な見方で比較して、「自分にとっての押し筆箱」を見付ける授業でした。始めに、児童が筆箱を選ぶポイントを挙げ、大きく4つの視点にまとめました。前時に消費生活についての講話を聞いていたため、児童からはエシカル消費やSDGsの視点も挙がりました。次に、4種類の筆箱の実物や説明を見ながら、4つの視点で自分なりの評価をしました。オクリンクを使って○や△などの印で見やすく評価し、押しポイントを自分の言葉で記入していきました。それぞれの筆箱の評価と押しポイントをグループで紹介し合った後、学級全体でグループで話し合った筆箱の押しポイントを共有しました。最後にもう一度、自分にとってより良い筆箱を考え、押し度とその理由をオクリンクに記入しました。振り返りでは、友達の意見を聞いてエシカル消費の視点も大事だと気づき、これから物を購入する際に色々な視点から考えていこうという意識を高めることができました。



2 グループ協議

①「自分の生活の中から課題をもち、様々な解決方法を考え、その課題に夢中になって追究し、生活をよりよくしようと工夫する子供の育成を目指した授業」の視点より

- 子供たちにとって身近な筆箱を取り上げたことで、自分事として考えることができた。
- オクリンクを使用したことで、自分の考えを伝え、友達の考えと比べることができ、意欲の向上につながった。

△手に取るだけでなく、文房具を入れたり落としたりして、実際に使ってみると見方がもっと広がった。

②「小中5年間のつながりを意識し、見方・考え方を働かせる深い学びにつながる学習過程、問題解決的な学習など、新しい内容を踏まえた工夫された授業」の視点より

○4種類の筆箱それぞれのよいところを出させたことで、様々な価値観を認めることにつながった。

○押し度のグラフは、微妙なニュアンスを表すことができてよかった。

○話し合いを通して最初の意見と変化した子もいて、児童は「自分にとって」いいものを考えられていたと思う。

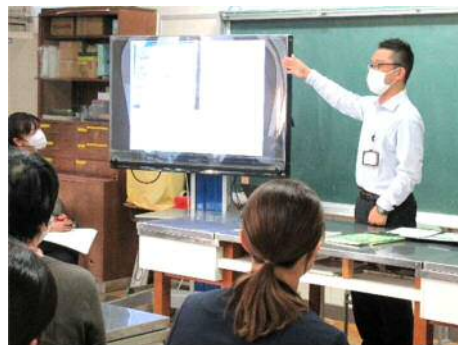
△タブレットでの作業は個人作業になりがちだったので、それを生かして全体で考えを共有し、賛成や反対などの意見を出していけるとよかった。

3 市教委指導主事 前田浩平先生の講話より

これからは小学校からの消費者教育が大切になってくる。浜松市は消費者教育が進んでいて、浜松市の実践が「初等教育資料」に掲載されることになった。

今回の授業は、掲示物で1時間の計画だけでなく、題材全体の計画を児童と共有したことで、児童は見通しをもって学習に臨むことができていた。また、「自分にとって」よい筆箱を考えるために「押し度」という尺度を使ったこともよかった。環境に配慮したDの筆箱を選ぶ子は少ないかもしれないが、今回の授業によってDの「押し度」が上がっている事実が大切である。

本時の授業だけでなく、題材全体を通して目標を達成することが重要である。指導案を書く際は、「指導と評価の計画」の方に重点をおいてほしい。家庭科における学びに向かう力とは、粘り強さ、自己の学習調整力、生活をよりよくしようとする実践的態度である。やらなければいけないことは、全て学習指導要領に書かれているので、学習指導要領をよく読んでほしい。



【編集後記】

第3回家庭科研修会では、トートバッグを2回作る題材構成にしたり、エシカル消費の視点を重視し、押し度という尺度を採用したりと、様々な工夫をした大変興味深い授業を参観することができました。今回の研修で得た事を、各学校での家庭科の指導に生かしていけたらと思います。

庄内小学校 原田 佳代子